
謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎解きはリボーンの後で・・・

【Nコード】

N3742Y

【作者名】

時雨

【あらすじ】

オリ主である高嶺 朱雀は目^{たかみねすざく}を覚ますと一つの部屋にいた。扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによつて並盛高校に行く羽目になる。

何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃったり、原作とは一味違う技習得しちゃったり、んで何故か難事件に挑んじゃったり、様々な出来事が起こっちゃいます。楽しんで見てください。

目を覚ますと・・・（前書き）

初の二次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください！

目を覚ますと・・・

目を覚ますといつもの朝だった。

眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入ってくる。小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。

いつも通りの朝だった。だが一つだけ違うところがある。

「・・・どこだここ？」

俺、高嶺 たかみねささく 朱雀はとある部屋のベッドにいた。

しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそうなあの無駄に広い部屋だ。

カチャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あつ。お気づきになれましたか」

そこには黒のダークスーツ姿の男がいた。

「後気分はどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょう？」

「あんた誰？」

すると男は、

「ところで朱雀様。入学式の準備は整っておりますか？」

「入学式？」

「はい。明日は並盛高校の入学式でございます」

「え？俺そんなとこ受けてないけど」

「これも旦那様の計らいでございます」

あの野郎おおおおおおお！！！！！！！！！！
と、俺は心の声を必死に抑えながら、

「い、いや。ただけど」

「作用でございますか。それではご用意いたしましょう」

黒野は手に持っていたリモコンを操作した。すると、壁からそれはそれはなが〜いクローゼットが出てきた。

「えーと・・・これは？」

「こちらの中から一セット、制服を選んでいただきます」

「選ぶって・・・これ何種類あるんだよ・・・100はあるんじゃないか？」

「正確には112種類でございます」

「112！」

再び俺は目を丸くした。

「何でここまで作っただか・・・いつそ私服校の方が良かったんじゃないか？」

「それは同感でございます」

「しゃーない。とっとと選んじまうか！」

とは言っただものの、普通に一時間もかかってしまった。やはりここまで多いと時間はかかるわな・・・。

結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチェックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ」

「そりゃどーも」

「では、次はカバンなのですが」

「まだ選ぶのか？」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、etc...」

「あー分かった分かった。とにかくさっさと選んじまおう」

そして早速、バックを選び始めた。

バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。俺は手下げ型のカバンを選んだ。

その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方頃だっ

た。

「やっと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野はコーヒーを机の上に置いた。

「そういえば、ここから並盛高校は近いのか？」

「はい。歩いて15分の所でございます」

「チャリで10分といったところか・・・」

「自転車で行くおつもりですか？」

「当たり前だろそんな近いんならわざわざ車で行く必要無いだろう」

「いえ、そうゆう事ではなくて無いのでございます。自転車が」

「え！そうなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行ってその後で買いに行くか」

そうしてかれこれ一時間経ち、時刻は10時半。

「もう10時半か・・・そろそろ寝るか」

こうして俺は慌ただしい1日を終えた・・・。

目を覚ますと・・・（後書き）

いやゝ何か見る限りほとんどオリジナルになってしまいました。

なんか・・・ねえ・・・（前書き）

第2話

いやゝ今回は前回よりも長くなってしまいました。頑張って読んでください。
あと少しグダグダです。

なんか・・・ねえ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスーツケースがあった。おそらく黒野が準備したもののだろう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちくださいませ朱雀様」

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには二つのリングと懐中時計があった。

「これは？」

「こちらは並盛高校から贈られてきたものでございます。なにも個人認識のようなものだとのことですよ」

ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとう」

俺はリングをチェーンに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れた。

「それじゃあ、行つてきます」

「行つてらっしゃいませ朱雀様」

）．．．．．）．．．．．

今、俺は一年生の教室にいる。だが．．．これは．．．ねえ．．．。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが．．．』

分かりやすく言つてしまえば、I の第1話でゆう一的気分である。

ただ一つ違つとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが．．．その男子でさえも俺の事を凝視している。怖いよ．．．怖いよパト ツシュ．．．。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

ああ。そういえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田．．．綱吉だったかな。帰つたら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わつたんだが．．．未だに視線を感じる。すると一人の男子が近づいてきた。

「よっ！俺、山本 啓信^{けいしん}て言つんだ。よろしくな！」

その男子は他とは違い、どこか抜けているいわば天然な奴である。

「あ、ああ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なあ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でって、そりゃあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そつ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

ああ。そういえばあつたな・・・あん時は驚いたよだっていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なあ。その七部属性には何があるんだ？」

「ああ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言うことになる。みんなのリングを見てみる」

俺はクラスのみんなの指に目をやった。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。そこで気づいたのは、

「みんなほとんどデザインが違うんだな」

「まあな。リングのデザインによってそいつがどこに所属するかがほとんど分かる」

そこで山本は、

「そうだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？ああ。いいけど」

俺は首に下げていたリングを山本に手渡した。

「おっ！やっぱり朱雀もアニマルリング持ってるのか」

「アニマルリング？」

「ああ。アニマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・これは、鳥だな」

「ふーん。で、もう一つは？」

「ああ。これは・・・」
すると山本の見目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング?」

「ああ。この学校の中では三つのAランクオーバーのリングを持つファミリーがある。シモンファミリー、ミルフィオーレファミリー、そして、ボンゴレファミリー」

「そのうちのボンゴレファミリーのリングがこれって訳か・・・」

「ああ。でもまあ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え?」

俺は頭の中に?のマークが浮かんた。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「ああ。俺もAランクオーバーでボンゴレファミリーだ」

やっぱりか・・・。ん?てゆうことは・・・。

「なあ。俺達の他にも後5人いるってことか?ボンゴレのAランクオーバーが」

「まあそうゆうことになるな」

いったい誰だ?

「まあ一人はめぼしはついてるんだがな」

「え?誰?」

「俺の友人で嵐のAランクオーバーがいるんだ」

「そっか・・・んじゃあ明日会ってみるか」

「ああ。んじゃあ今日はこれで」

「おう。また明日」

そして今日は帰宅した。

～・・・～帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。

「なあ。黒野」

「何でございましょう?」

「お前、うちの校長先生について何か知ってるか?」

「校長先生と言いますと?名前は?」

「確か沢田 綱吉だったかな」

すると黒野の手が止まった。

「ん?どうかしたか?」

「朱雀様、それは確かでございますか?」

「あ、ああ。そのはずだけど・・・誰なんだ?」

「あの方はボンゴレX^{デーチモ}。ボンゴレファミリー十代目でございます」

「え．．．ウソだろ．．．」

「もう帰っていらしたのか．．．」

「なあ。何でお前校長先生の事知ってるんだ？」

「私は．．．」

その後、黒野の言ったことは、

「私はボンゴレ十代目の守護者だからでございます」

「なん．．．だって．．．」

「守護者といっても正確には少し違いますが．．．」

「どうゆうことだ？」

「私の属性は確かに大空の七部属性なのですが、私は他の部隊に所属していました」

「他の部隊？」

「はい。私が所属しているのは．．．」

その後、俺は黒野の言ったことに耳を疑った。

「私が所属しているのは．．．チェデフCEDEFでございます」

「CEDEFってボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問でもある組織だよな」

「作用でございます。良くございで」

「まあ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知ってんな」

「はい。彼はボンゴレ十代目、雨の守護者山本武様の息子にあたります」

マジかよ・・・。

その後、俺は黒野の話聞いた。話によれば、残りの守護者はあの学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆうまでは知らないのとこのとだ。

まあその事に関してはいいや。明日からはちゃんと自転車で行けるから今日よりはゆつくりと行けるからぐっすり寝るとしよう。

こうして俺は眠りについた。

その頃、学校では、

「集まり始めたな・・・」

「ああ……」

「ボンゴレとシモンのような……」

校長室には二人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ真の後継者が・・・」

その校長室には柔らかな月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねえ・・・（後書き）

まさかの黒野がCEDDEFとゆうオチ・・・。

次回も頑張ります！

（
（

ルームメイトはお嬢様？（前書き）

第3話

やっとヒロインの登場です。

ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そう。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが・・・。

「こいつが俺の友人、佐久間 翔太だ」
さくましようた

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間 翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物なのだが、どうも不良のように見えない。

え？どうゆう意味だつて？んゝ・・・分かりやすく言えば、なんとなくか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくいるじゃん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあちゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「ああ。大空のAランクオーバーの高嶺 朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。
すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ」

「え？綱吉さんに？」

「ああ」

佐久間はあつさりと答えた。

「どこが？」

「まあ、なんとなくかわかんねえけど、とにかく似てる」

「は、はあ・・・」

こうして新たな仲間が増えた。

くくくくくくくくくくその日のHR・・・。
寮の部屋割りが発表された。

「えーと、俺は027号室か・・・」

部屋割りの横に寮への地図があるのだが、迷う所ではなかった。なぜなら・・・。

『あそこって学生寮だったのか』

そう、そこは俺と黒野がいるあの屋敷だったのだ。

『なるほど。どうりで無駄に広いわけだ・・・』

その後、俺は迷う事なく寮（屋敷）に着いた。
入ったところに山本と翔太がいた。

「お前らも寮生活なのか？」

「ああ。それで俺と翔太は同じ310号室になったんだ」

娘でございます」

へー。まあ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさい！」

「ですからそれは・・・」

「かしこまりました」

「え？」

「わたくし私^{わたくし}があなたの執事となりましょう。お嬢様」

「朱雀様！」

「・・・あなたに出来るの？」

夏希が疑いの目で見てきた。

「ご安心ください。私、人のお世話は得意中の得意ですから」

「そ、そう。ならあなたに任せるわ。えーっと・・・」

「高嶺 朱雀ともうします。以後お見知りおきを」

こうして俺と夏希お嬢様の生活が始まった・・・。

ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いやゝ。今回は朱雀が執事になるとゆうオチ・・・。
次回も頑張ります！

え〜っと・・・どちら様で・・・？（前書き）

第4話

今回はリボーンに出てくる“あの人”が登場します！

えっつと・・・どちら様で・・・？

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようございますお嬢様。昨日は良く眠れましたか？」

「ええ。おかげさまで・・・ところで朱雀」

「はい。何でしょう？」

「あなた何してるの？」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言った。

「今ちょうど出来上がりました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、
コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も1日が始まった・・・。

「・・・」俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待つことにした。

「ごめんね待たせて」

「いえ、ではまいりましょう」

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ」

「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フッフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前ら！」

「いいから、教えてよ」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

二人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で二人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校2年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話を聞いた。

「高嶺 朱雀だったな。お前に決闘を申し込む！」

「は、はあ」

「放課後、剣道場にこい！逃げるんじゃないぞ！」

と、言つて持田先輩は去つていった。

はあー。どうしよう。しゃあない、行くか・・・。

~~~~~放課後、俺は剣道場にいた。だが何か様子がおかしい……。なぜならそこには剣道部員だけではなく一般生徒もいるからだ。

「なあ山本。持田先輩ってそんなに強いのか？」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん・・・」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「ああ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝った方は賞品として、池沢 夏希を手に入れる事が出来る！」

周りからは黄色い歓声（？）が聞こえてきた。

「まあ何でも良いですけど、人を賞品扱いするのはどうかと思いま  
すが……とくにお嬢様となれば……ただじゃおきませんよ」

「うるせえ！とつと始めるぞ！」

「その前に僕の胴着は？」

そのんなのお構い無しに持田先輩は突っ込んで来た。

「無し……か……まいつか」

俺は竹刀を握り歩き出した。

「何もしてこないとは、ブア力の極みだな！」

「失礼ながら持田先輩、それはあなたの方ですよ」

すると俺は持田先輩の一撃を必要最低限の動きでかわし、

[illegible]

一瞬の事だった。

周りの生徒達は何が起こったのか分からずにいた。しかし、山本と佐久間は、

「勝負あつたな」

「だな」

すると、持田先輩の面が真つ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しょ、勝者、高嶺　朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こった。

「ふう・・・終わったか・・・」

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした・・・。

「・・・」時間過ぎて今は夕食の時間。夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そつえば朱雀」

「何でしょう？」

「剣道場の時思ったんだけど、あなた剣道したことあったの？」

「いいえお嬢様。一度もありません」

「ウソ！じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」



「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじゃおきませんよ』は?」

俺はあーと言い、

「失礼ながらお嬢様、我々執事の指名はなんだと思いますか?」

「え?それはこんな風に食事を作ったり掃除をしたり」

「それもちろん大事なことでございます。しかし最も大切なのは主であるお嬢様を守ることでございます」

「え?」

「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていくとゆうことをお忘れ無きように」

夏希はその言葉の後、窓から見える月を眺めた。

えーっと・・・どちら様で・・・？（後書き）

持田先輩・・・、ご愁傷様です・・・。

次回は謎解きします！

殺しのワインはいかがですか？（１）（前書き）

## 第5話

今回は投稿が空いてしまいました。

そして今回は自己最長のページ数です「。 。 」

皆さん、頑張って読んでください・・・（ ）

## 殺しのワインはいかがですか？（１）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。

そりゃそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねえねえ、朱雀君って剣道やってたの？」

「私も教えてほしいなあ」

こんな感じでずっと質問攻めにあっている。そんなところに、

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかつつと、疲れてるように見える」

「あたりめーだ！ここまで質問攻めにあって平気な奴を俺は見えて見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かっていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすげーよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る」

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まあ、唯一苦手なのは、女子だけだな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほーら席に着けー。つっても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがった。確かに、自習ついても先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「ああ」

そして、一日が始まった……。

授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰っていると、

「きゃあああああ……!!」

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ！」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の二階に向かった。

「どうしました！何があったんですか？」

「あつ……ああ……」

その女性は目の前を指差した。そこには、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座って死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあった。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様つてばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから10分後、すぐに警察が到着した。

「・・・」  
「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・ってあなた何で知ってるの！」

おっと、口を滑らせてしまった。今度から気をつけないと。

「実を言つと今日、お嬢様を見守らせていただきました」

「そんなことしたら見つかるわよ！」

「申し訳ありません。今度から気をつけます」

夏希はため息をついた。

「はあー。やっぱり自殺なのかなー」

「と、言いますと」

「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだったわ。おそらく自殺するために使ったのかもね。朱雀、あなた何かわかる？」

俺は少し黙り込んで、

「い、いえ私にはさっぱり・・・」

『そうよね。刑事が一般人に質問してもね・・・』

夏希がそう思っていると、

「しかし、お嬢様は今日何人かから証言を聞いているはずですよ。その内容を詳しく話していただければ私<sup>わたくし</sup>なりの考えが述べられるはずです」

すると夏希は少し考えた後、

「分かったわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

「……まず死亡した男は、若林 辰夫<sup>たつお</sup> 62歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいったら寝室であの状態だったわけ。」

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見ろ、池沢君。若林 辰夫は寝る前にワインを飲んでいたのだ」

で、誰でもわかるようなことを言ったんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらっしゃいますか？」

「まあ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林家の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、若林 輝男<sup>てるお</sup>は、

「刑事さん、ひょっとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林 圭一<sup>けいいち</sup>は、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だというんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないといっているだけでして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、



「まあ、刑事さん、なんて物騒なことをいうんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」

次に次男の若林 修二は続けて、

「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っていることだ。そうだろ」

「と、いいますと」

「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代 雅美まこみとの再婚を考えていたのです」

「それで、皆さんの反応は」

「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産目当てに違いありません」

すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。

「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は」

「そりゃあ、すごい落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」

「しかし、僕らは父の為に善かれと思って言っただけですから」

今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修二に、

「おい、お前ジッポー持ってたよな。貸してくれ」

やれやれと修二は言いながら、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「ええ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代 雅美が入ってきて、

「旦那様は自殺などではありません！旦那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にきなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいだね！」

すると春絵は続けて、

「ええ。判ったわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取ろうとしているのでしょー！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！この恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おっと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は1時45分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろ。もう少し見たかったが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあった見事な蔵書ぞうしに目を奪われておりました」

「ちょっと！ちゃんと仕事なさい！」

「なんと、私が愛読してやまない『ハーポツ』の最新版があったのでございます」

「無視すんな！てゆうか人んちのものを勝手に取ってくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですがってあつ！」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行ったんだけど、

「ええ。来ましたよ」

「どんな様子でした？」

「うーん・・・なんか陽気な感じだったわ」

「はあ・・・」

「あつ！でもカラオケで十八番を歌おうとしたら急に泣き出して」

「急に・・・ですか・・・」

その後、私達はスナックの手伝いをしたの。

「あのー何を作ってるんですか？」

「ん？ああ。最近、経費削減の為にからしをチューブから練りからしに変えたのよ。でも大変なのよね」

「は、はあ・・・」

その後、向かいに住んでいる少年の話によると、

「君が雄太君だね。話があると聞いてきたんだけど」

「うん。あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」

「それは何時くらいのことかな？」

「真夜中だよ。午前2時ごろ」

少年は指を2本立てて答えた。

「雷の音で目が覚めてトイレに行こうとしたらおじいちゃん先生の部屋から小さな明かりがゆらゆらーって動いてたんだ」

「少年よそればどんな明かりだった？マツチか？ろうそく蝋燭か？」

「そこまでは見えなかったよ」

まあ、この少年の証言は事件にあまり役立たなかったわ。

「………」  
「どう？朱雀。やはり若林 辰夫は自殺つてことで問題ないでしょ」

しかし、俺は険しい顔をしていた。

「いいえ………。それは大問題でございます。お嬢様」

「え？」

「お嬢様、これは殺人でございます」

「え！」

「失礼ながらお嬢様、お嬢様はどのあたりに毒があったと思いましたが？」

「えっと……。グラスに塗られていたとかは」  
俺は首を横に振り、

「いいえ、こちらをご覧ください。これは磨いたグラスでございます。このとき指でふれた場合」

そして触れてみると、指紋がくつきりつついた。

「あ！」

「このように、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかった。つまり、考えられる事は1つ。ボトルの中に毒を入れたのでございます」

「どうゆうこと？」

「こちらをご覧ください」

俺は黒野に1本のワインボトルを取り出させた。

「これは？」

「イーヨー ドーの1995円でございます」

「ホントだ。値札が貼ってある」

夏希はボトルをジーツと見た。

「ねえ、朱雀。これ、どっから見ても毒を入れるところなんてどこにも無いわよ」

俺は「あー・・・」と言い、その後黒野と顔を見合わせ、

「あの・・・失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイツと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でございますか？」

「……ハア？」

夏希の持っていたコップに亀裂が入った。

「あの……お怒りのようでしたらお詫びを……」

「謝ってすむならこんな態度しないわよ！」

夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。

「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言つの？」

「いきなり話が変わりましたね……。まあ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし……」

「何よ」

「今ここで犯人を言ってもお嬢様にはご理解いただけないかと……」

「……」

夏希は一瞬、拳を振り上げそうになったが必死にその手を降ろし、

「朱雀、私にも分かるように説明して」

その顔はいかにも屈辱に溢れていた。

「……かしこまりました。お嬢様」

すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続きでございます」

目の前に料理を出すと、

「謎解きはディナーの後にいたしましょう」



殺しのワインはいかがですか？（1）（後書き）

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張ります。（^ - ^）o

殺しのワインはいかがですか？(2)(前書き)

第6話

今回グダグダです。

## 殺しのワインはいかがですか？（２）

夕食は終わり俺、黒野、お嬢様は大広間にいた。

「では話の続きをいたします。まず、犯人はどうやってワインボトルのラベルをはがさずに青酸カリを入れたのか。それは簡単でございます」

俺はもう一度ボトルの口を見せた。

「よくご覧ください。ここに小さな穴が二つ空いているのが見えますでしょうか？」

「え！」

夏希はもう一度ボトルの口を見た。確かにラベルの頭に小さな穴が二つ空いているのが見える。

「これは？」

「恐らくワインの熟成を促すための空気穴でございます。ワインボトルを見慣れていないお嬢様が分からないのも無理はありません」

「ふん！どうせ私の目は節穴ですよ！」

どうやら夏希はまだあの言葉を引きずっているらしい。

「で、その穴から注射針かなんかで毒を入れたってことね」

「さすがはお嬢様、ご理解がお早い。おそらく、辰夫氏が外出している間に部屋へ侵入し、毒入りワインボトルとメッセージカードらしきものを置いていったのでございます」

「メッセージカード？」

「これに関しては後ほど説明させていただきます」

そして俺は続けて、

「まず、お嬢様は辰夫氏が自殺したとお考えのご様子。しかし私はそうは思いません」

「どうして？だって辰夫さんは涙を流すほど思い悩んでいたのよ」

「それは勘違いでございます。スナックのママはからしを練りからしに変えたと言っていました。そこに涙の原因があつたのです」

「え？」

俺は二つの皿を持ってきた。

「こちらに市販のチューブのからしと練りからしをご様子しました。ご賞味ください」

夏希はまず、チューブのからしをスプーンに取り食べ、苦い顔をしながらも練りからしを食べた。すると、

「！こっち辛っ！」

「はい。練りたてのからしは涙がちょちょぎれるほど辛いものなのでございます」

「先に言つてよ」

夏希は涙目で言った。

「つまり、辰夫氏の涙の原因は精神的苦痛ではなく、人間の反射運動によるものだと思われます」

「なるほどね」

「そして次に注目すべき点は雄太少年の証言にあります。少年は辰夫氏の部屋から小さな明かりが見えたと言っていました」

「でもあの証言はあまり役立たないわ」

「いいえ、お嬢様。これは重要な証言でございます。まず、私が辰夫氏の部屋にいたとき入り口の脇の棚に懐中電灯が置いてありました。なのになぜ、火を灯したのでしょうか？」

「えっと……。停電だったから？」

「確かにそれもございます。しかし、若林家の人間はあそこに懐中電灯があったことを誰もが知っているはずです。つまり、部屋にいたのは懐中電灯が無くて困らなかった人物に絞られます」

「そつか。それじゃあ、犯人は手元にライターやマッチを持っていたあの喫煙者達に絞られる」

「作用でございます。しかし、マッチの明かりでは作業には不十分でございます。作業中、何本もマッチを擦らなくてはなりません」

「てことはマッチを使っていた輝男は犯人ではないわね」

「はい。さらに圭一の妻、春絵も犯人ではございません」

「どうして？」

「彼女は喫煙者ではないからです。あの時圭一はライターのがスが切れたとき、隣に座っていた春絵ではなく、修二から借りた。すなわち、春絵は火を点ける物がなかったとゆうことになります。そしてさらに普通の100円ライターではボタンをずっと押し続けなければ火は消えてしまいます」

「てことは、圭一も除外されて、犯人は修二ってことね！」

お嬢様は自信ありげに話したが俺は、

「まあ、半分当たっていて、半分間違っているといって良いでしょう」

「え？どうゆうこと？」

「ここで先ほど話したメッセージジカードについて話しましょう。恐らく犯人は辰夫氏に毒入りワインを確実に飲ませるためにメッセージカードを使ったと思われます」

「え？」

「お嬢様、昨日はどのような天気だったかご存じでしたか？」

「えっと・・・確か雷と雨が降っていたわ。でもそれが何か？」

「雄太少年の証言によると、辰夫氏はいつも窓を開けていました。」

そして、藤代 雅美さんの証言によると寝る前に本を読んでいたと言っていました。しかし、あの時機の上には本など一冊もありませんでした」

「確かに無かったわ」

「そして、私は本棚を見て、一つ疑問に思ったことがありました」

「疑問に思ったこと？」

夏希は首をかしげた。

「はい。それは一冊だけ逆さまだったことです。10冊や15冊ならまだしも、一冊だけ逆さまなのは少し違和感がございます」

「確かに。でもどうして？」

「犯人が暗闇のなか作業していてうっかり間違えたのでございました。恐らくその中に・・・」

「メッセージカードがあるってわけね。でも一つ分からないのは動機よ」

「遺産争いでございましょう。恐らく辰夫氏は藤代 雅美さんとの結婚を押し切るつもりだった。このままでは遺産が減ると考えた犯人は辰夫氏を殺害した」

「お金のために大切な家族を殺す？ 私には想像もつかないわ」

俺は眉間にシワを寄せた。

「お嬢様にはご理解出来ないかもしれませんが。しかし、人は数千万・・・いえ、わずか数百、数十万でも殺意を抱くものなのでございま

す。お嬢様は生涯お金に苦労する事はないかもしれません。しかし・

俺はお嬢様の目を見て、

「お金というものはそれほど恐ろしい物なのだと言うことをお忘れ無きように」

夏希はしばらく黙っていた。そして、

「若林家に行くわよ朱雀」

俺は口元に笑みを浮かべ、

「かしこまりました。お嬢様」

〃・〃・〃・〃・〃・  
 〃・〃・**ピンポン**・  
 〃・  
 〃・

「はい」

扉からは藤代 雅美が出てきた。

「お邪魔するわよ」

「え？」

「失礼します」

「え？え？」

俺とお嬢様は真つ直ぐ辰夫氏の部屋に向かった。



「ちょっと、何なんですかあなたたち！」

若林家の人達も集まってきた。

俺は本棚にある逆さまの本を見つけ出した。

『これだ』

その本ねページをパラパラとめくっていくと、封筒のような物が挟まっていた。そこには藤代 雅美以外の家族のメッセージが書かれたメッセージカードだった。

「ここに書かれたことはどれも本心ではございません」

「どうゆうこと？」

「家族全員が共犯者とゆうことです。家族で相談し、辰夫氏を殺害したのでしょう」

「どうして・・・どうしてですか！」

雅美さんは叫んだ。

「うるさい！お前が俺達の金を・・・」

「いいえ、それは違います。辰夫氏は藤代 雅美さんを新たな家族として加えたかっただけでございます」

「なに？」

「あちらでございます」

俺はワインが並んでいる棚を指差した。

「あのワインは圭一さん、輝男さん、修二さん、春絵さんの生まれた年のワインでございます。そして、この鍵の番号は109。亡くなった奥様の誕生日でございます」

そのとき家族の全員がハツとした。

「やはり辰夫氏は亡くなった奥様のことを忘れずに覚えていたのでございます。彼はこの中に雅美さんという新たな家族を入れたかった。ただ、それだけだったのです」

その後、警察が来て四人を連れていった。

「分かってたの？家族が共犯者だって」

「はい。家族の証言は辰夫氏は落胆した顔で出て行ったと言っていました。しかし、スナックのママは辰夫氏は陽気だったと言っていました。つまり、家族全員が口裏をあわせていたということ。本当は結婚に賛成していたのでしょうか」

夏希は複雑な顔をしながら、

「そんな矢先に家族によって殺される。辰夫さんどんな気分だったか」

俺達は黙りながら寮に戻っていった・・・。

殺しのワインはいかがですか？(2)(後書き)

今回はあまり良い出来ではありませんでした。

次回頑張ります。(^-^)

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（前書き）

## 第7話

今回は短めにしました。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？

5月

春が少し終わりに近ずき、桜が葉桜に変わる頃。教室ではあることが話し合われていた。

「そんじゃあ、玉入れの選手が決まって次は騎馬戦の大將なんだが・・・誰がやる？」

そう、話し合われていたのは二週間後に開催される体育祭のことだ。俺は綱引き、棒倒し、リレーにでることになっている。

そして今は、体育祭の目玉である騎馬戦の話し合いをしていて、誰が大將をやるのかを話し合っている。

「で、事前に候補のアンケートをやったんだが、候補になったのは朱雀、お前だ」

「え！俺！なんで！」

「そりゃあ、この前の持田先輩との対決を見れば・・・なあ」

なあじゃねえよ！なあじゃ！

「普通の騎馬戦ならまだしも去年の体育祭の騎馬戦。ビデオで見たけど、ありゃあ戦争だぞ！戦争！」

「え？それが騎馬戦じゃないのか？」

おい実行委員。あんたビデオ見てたのか？あんた見てないからそん

なセリフをサラツと言えるんだよ！

「で、どうするんだ？」

うつ……。みんなの目がこの上ないほど輝いている。「いけ！朱雀！」とか、「お前はヒーローだ！」とか、「もっと熱くなれよ！」とかいう気持ちが痛いほど伝わってくる。

『ここは……。やるしかないのか？どうする……。どうするア  
ッ』

そして迷った末、

「……。分かったよ。やってやる」

その瞬間、クラス全員の歓声が湧いた。

「あー。喜んでいるところ悪いんだが、俺の騎馬は誰がやるんだ？」

その瞬間全員が石ように固まった。

てか、それ頭に入れてなかったの？みんな？

そんな中一人が手を挙げた。

「んじゃあ俺がやるよ」

「！山本！」

「こんくらいはやんねーとな。で、後は誰がやる？」

そしてそれから10分後、ようやく騎馬が決まった。

「よし！体育祭まであと二週間。張り切ってこーぜ！」







体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（後書き）

戦争みたいな騎馬戦ってどんな感じでしょうねWWW  
想像しただけで恐ろしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3742y/>

---

謎解きはリボーンの後で・・・

2011年12月1日19時56分発行